

Ep. 17

博物館の インターネット活用

さらに先へ進むITのチカラ

情報システムって？ それを使うと来館者が増えるの？ ほんの数年前まで「なぜ情報整備が必要なのか」を説いて回ったものですが、最近、急速に状況が変わってきた気がします。私たちシステム会社よりも先進的な学芸員が少なくないのです。

弊社で実施している「導入館インタビュー」、ご覧いただいておりますでしょうか。Webサイトでも公開しておりますが、スタートから現在まで計63館、足掛け5年が経過しました。最初に比べると臨機応変に話ができるようになり、最近では熱のこもったディスカッションとなることもしばしばです。

先日、データベースの公開を果たしたばかりの、ある資料館へのインタビューでのこと。一仕事終えてのご気分をお聞きしたところ、感想もそこそこに、新たな構想が次々と出てきました。

インターネットで情報公開すると、利用者からの問合せの質が明らかに変わります。ということは、それに対応する学芸業務の動線も変わるはず。「こんな資料はありますか？」という質問が減り、問い合わせ内容はより具体的になります。

「この作家は、そのモチーフに対してどんな感情を抱いているのか、理解できる資料はあるか」といった具合。Webであらかじめ調べているわけですから、問い合わせの内容が高度化するのも当然のこと。答えるほうは大変ですが、博物館冥利に尽きるというものではないでしょうか。

「完全テキスト化」なんて、5年前は夢の夢でした…

自身が精通していればそうした質問に答えられますが、専門外の場合はシステムの出番となります。しかし、現状ではどう検索すれば目的の情報を見つけられるのか、即座に判断がつかえません。資料データとしては登録されているはずなのですが、中身が画像などテキスト以外の場合は、あらかじめ検索語としてタグで管理しておく必要があります。

そこで、この館では、文献資料の全文データ化、完全テキスト検索をお考えとのこと。確かに、すべてテキスト化されていけば検索効率は劇的に上がります。それを誰が入力するのかと

いう問題が残りますが、読み取り制度が格段に向上した現在のOCRであれば、不可能ではありません。

これ、5年前のインタビュー開始の頃なら、夢物語だったんですよね。隔世の感とはこのことです…。

いま話題の「電子書籍」配信などにも活用できる？

別の館では、「まだシステムを導入する予算がなかった頃、汎用ソフトで担当分野のDBを作っていたところ、テーマで検索したら小企画展のプランができてしまった」とのこと。これはまさしく情報化の副産物で、目からウロコが落ちる思いでした。

デジタルデータを公開したら、地元メディアの注目を集め、結果的に運営方法に対する厳しい議論は止まった…という話もあります。いま流行りの「デジタル書籍配信」に絡めれば、博物館データの二次利用も考えられ、館の存在感もグッと上がるかもしれません。

ほんの数年前まで、情報公開を提案すると「インターネットで見られるなら、来館者が減るではないか」と叱られたりしたものです。弊社ですが、最近は環境が大きく変わり、「登録情報をどう使うか」「館運営にどう活かすか」という議論が劇的に増えました。本当に、時間の流れは速いものです…。



「システム」のことだけを見ていたら、こうした空気の変化に気付かなかつたかもしれません。私たち業者が気付かないうちに、お客様がどんどん変化しているのかもしれません。

博物館は、情報を武器にし始めている。これは、この5年間の大きな変化の一つではないかと思います。